慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	横濱市子安町貝塚試堀記
Sub Title	
Author	山口, 昌(Yamaguchi, Akira)
Publisher	三田史学会
Publication year	1925
Jtitle	史学 Vol.4, No.3 (1925. 8) ,p.155(467)- 155(467)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250800-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙　報

横濱市子安町貝塚試掘記

去る六月廿八日、横濱市子安町打越貝塚試掘の爲、慶應義塾大學文學部史學科に於て、橋本、移川、伊本、間崎の四教授と卒業生學生の一行十七名は學生大澤大宮宮本君等の先達にて赴いた。

子安貝塚の位置は、鶴見町の南方にして、東海道本線の右崖にありて、東南は近くは横濱港を、遙に房總の連山を望み、頗る高臺の眺望に富む標高約三十米の地點である。現在一部分は開墾されて大根畑となり、道路を隔てて他の一部は雜木林となつて居る。

次に貝塚の地域は、東西の幅一邊は約四十五尺、他の一邊は約六十尺にして、南北の長さ約百尺である。

是より先、第一回の試掘の際には、骨片、貝殼、土器の破片等を發見したのであるが、今次第二回その一部の發掘にて雜木林中に於て土を混ぜざる純貝層を發見した。貝層の深さは場處によりて一樣にあらざるも、約三尺の層である。その上に薄き二三寸堆積せる黑土がある。この純貝層の上に更に貝層ありしを現土地所有者の先々考時代に他に移せしことがあつた。然し貝塚上部の土を混へたる上の黑土の中に於て、仰臥せる人骨一軀を發見し、人骨の周圍より土器の破片、貝製裝飾品にして腕輪に用ひしと覺しきもの一片、石簇一個も發見したのであるが、副葬品と見るべきものは何ものも見當らなかつた。人骨は仰臥伸葬にして頭蓋骨より下肢の尖端までの長さ約五尺三寸、頭蓋骨は碎かれゐたるも、その形狀を殘し、肋骨片、肩胛骨片、大腿骨片等人體の形狀を推知し得るものである。その他稍磨滅せる齒十數本も發見した。該人骨は必しも貝層中より發見せられたものに非ざる故、石器時代のものと絕體の推斷は出來ぬが爾來貝塚關係の人骨發掘に於て此種の前例もあり、又貝製腕輪等より推察する時は恐らくは石器時代の人骨と云ひ得る理由が多量にあるも、尙調査の必要あり。

貝塚中より發見せられたる土器の破片に就て見るに爾來當方面より出土せる繩席紋土器に屬するものである。破片は比較的少量であると云ひ得る。勿論、子安貝塚は最近發見せられたもので附近に尙數ヶ處所在せることは明かであるが、地形より該貝塚の研究を進めゆくも興味あることと思ふ。如何となれば子安貝塚は標高約三十米の高臺に在り、この標高の線に沿ひて行く時は、此高臺は往時に於て入江の内に面し、外洋風波荒くとも、よく之を防ぎ得たるなるべく貝塚の存在するも必然的と思惟せらるるからである。今回の發掘に於て、人骨の他に前述せる如き土器破片、石簇、貝製腕輪を始め、貝殼中に幾重にも貝の納めあるもの、貝殼中に羹の入れあるもの等も發見されたのである。

尙此貝塚に就ては、橋本、移川兩教授の適確なる考證研究の上詳細なる報告を後日發表さるる筈である。終りに、貝塚所在土地所有者竝びに野間氏、及び一行の先達の勞を執られし大澤、大宮、宮本君等に深き感謝の意を表す。（山口　昌）